

Title	松本芳夫氏提出學位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.24, No.4 (1951. 4) ,p.144(584)- 148(588)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510400-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

じている。なほその敘述の間に、カールライルの所説に批判を加えた點が注目される。

次に參考論文として添えられた二篇の古代終末論は、いづれも古代ローマ帝國の崩壊に關するものである。

その内、「ローマ帝國の變貌」は、古代の傳統的國家理念が衰えて、キリスト教的國家理念に置きかえられる時代の政治的情勢を、コンスタンチヌス大帝の改宗事情に結付けて考察したものである。著者は、帝の改宗を全然政治的に解釋することを非とし、エウセビウスその他の典據によつて、帝の宗教的信念を改宗の動機として重要視している。そうして帝國再興の努力も、政治的軍事的には失敗に歸し、遂にキリスト教的ヨーロッパ世界の誕生となつたものとした。

第二の論文「西ローマ崩壊についての一考察」は、ローマ帝國崩壊の事情を、主として政治的軍事的破綻に求め、殊に軍事的事情に重點を置いてゐる。要するに此二篇は、封建研究の前提として、主論文と關係あるものであり、特に文化的經濟的見地よりも、政治的見解の主となつてゐる點で、主論文と同じく、著者獨自の立場を明らかにしたものである。

要するに本論文の主題は、極めて廣汎且つ困難な問題である爲、獨自なる著者の主張と、それに依つて展開された論述とに對しては、種々批判の余地のあることは固より考へ難くはない。ただ我

が國の學徒にとつて至難とされている西洋中世史料の驅使や、文獻批判に於て示した著者の努力は、その獨自の見解と共に、中世史研究の上に少からぬ示唆と貢獻とを與へるものである。よつて、著者は、文學博士の稱號を受ける資格あるものと認める。

昭和二十五年二月

主 査 委 員

- 慶應義塾大學 文學部 講師 西 洋 史 擔當 文學博士 大 類 伸
- 慶應義塾大學 文學部 教授 西 洋 史 擔當 文學博士 間 崎 万 里
- 慶應義塾大學 文學部 教授 比較言語學 擔當 厨 川 文 夫

松本芳夫氏提出學位請求論文審査要旨

主論文

松本芳夫著「古代日本人の政治思想」

本論文は、序説、第一章國土について、第二章人民について、第三章統治者について、第四章統治について、第五章國家について及び結語より成つてゐる。

序説において部族社會と政治社會との區別を説き、政治社會即ち國家がその成立を見るべき重大要因は、異族の征服統治であるとしわが國の古代に關する重要史料である記紀について批判檢討し、本論文の取扱ふ範圍及び性質を明かにしてゐる。

第一章は古代人の國土觀念の研究であつて、國土生成の物語に現われた古代人の種々の思想を解明し、「オホヤシマ」の意義または葦原中國、豐葦原瑞穗國などの意味について、從來の諸説特に白鳥庫吉博士の説を批判して、「オホヤシマ」の物語は、もと瀬戸内海において發展したものであるが、大和朝廷の勢力伸張にもなつて國土全體を説明するものとなり、從來多數を意味した「ヤ」が、神聖視された「ハ」の意味に轉用されて大八島の概念が作られたと断定し、また豐葦原中國は國神を中心とする時の呼稱であり、豐葦原瑞穗國は天神を中心とする名稱であるとなしてゐる。要するに、わが國土は天神の創造したものであるから、その支配者は、天神及びその子孫でなければならぬという思想を古代人は有していたのであつて、これによつて國ゆずりの物語、天孫降臨の物語が生れてくるのである。

第二章においては、人民が統治者たる神からどう見られたかの問題を取上げ、神の代の「うつしきあをひとくさ」は、人民を愛すべきものとした思想を示したものであるとし、また人の代における人民の呼稱である「オホミタカラ」について、從來の説、特

に喜田貞吉博士の説を批判し、多くの例證をあげて博士の説に反對し、これは從來の如く大御寶とすべきであつて、支配者が人民をいつくしみ重んじたことを示すものとしている。公民の性質についても、これまで三浦周行、瀧川政次郎、川上多助、牧健二氏等の説が一定しないのは、これを「オホヤケノタミ」と讀まないためであると斷じてゐる。かくて古代においては人民は統治者にとつては愛すべきものであり、人民は統治者を神として仕えまつるものとなしていたのであつて、古代人は何故に人民は君につかえなければならぬかの反省が起るほどの知的發展を遂げていなかったもので、むしろ神という權威に身をゆだねることを喜びとさえしていたのである。

第三章においては、統治者が如何にみられたかについて論じてゐる。神の代の「キミ」、人の代の「スメラミコト」の最も重大な性質は、天照大神の子孫であるということである。このために天皇は「アラヒトカミ」となり、神聖であり、皇統の系たるべきこと、君主の一人たるべきこと、その地位の至上であること、その行動の絶對的であることなどの思想があらわれて、またこのために「ミタマノフネ」もしくは「ミイヅ」の觀念が生じてくるのである。このように人民に對しては絶對的の權威を有していた天皇も、天神に對しては人として仕えなければならなかつたのである。即ちこれは部族社會の遺風を示すものである。しかし政治の

優位が確立するに従つて、天皇の司祭者としての性質よりも、元首としての政治的性質が強まつてくるのである。さて神はその子孫に幸福と繁榮とを與へるものであるから、神である天皇も神の威力によつて、人民に幸福をもたらさなければならぬ。かゝる天皇を「いきほひまします天皇」と呼び、その反對の場合は、「悪しくまします天皇」と稱したのである。しかして天皇は天照大神の本質を具現するものとして、倫理的にもすぐれ衆望のあるものでなければならぬ。従つて皇位の繼承が重大となつてくるのである。神は人間にはかくされた神秘なものであるが、天皇の神性が強化されてくると、一般人民との接觸が不可能となり、人民との交渉はすべて「マヘツギミ」によつてなされ、實際の政治にふるることが少なかつたのである。ここに現實の政治における天皇の大權の制約がある。我國において代行政治が行われたのは、實際政治における天皇の無力のためであり、これは天皇の神性そのものに起因するのである。

第四章は、古代人の統治觀念の考察である、古代における祭政一致について、著者は、祭神が政治に強い作用を及したが、政治と祭神とは決して同じものでないとなし「マツリコト」と「マツリ」の語義について、植木直一郎氏の説に一步をすゝめて、「マツト」は強い具體性現實性を示すもので、即ち政治を指すものとなしてゐる。更に「知らず」「うしはく」の語義について、宣長を

初めとし井上毅、井上哲次郎、加藤玄智、河野省三、白鳥庫吉、安藤正次氏等の説を批判し、この兩語は語源的には同じでも、後者は極めて具體的な特定の場所の支配を意味するが、前者は抽象的で廣い意義をもつという語感の相違のあつたことを明かにしている。また古代の天皇の統治理念は、概して人民の安寧幸福を主眼としたものであつて、愛民思想は古典の隨所に示され、その文章はシナの古典より取つたものが多いけれども、その思想は古代の天皇の統治理念で、シナの影響によつて生じたものでないことを究明してゐる。

第五章は、古代人の國家成立に關する見解を論じたものであつて、國ゆづりの物語は古代人の國家成立觀を示す點が少く、これを最もよくあらわしているものは、「東征物語」であるとする。この物語は古代人が民族の移動と異族の征服とによつて國家が發生したと考へていたことを示すものである。しかして古代に於ては支配層が國家の權威を利用し、民衆の信賴と服従を得るために自國の優秀性尊嚴性を謳歌することとなり、さらにこれが神國觀念となつて發展するのである。この觀念は、わが國が神によつて作られその子孫によつて統治さるるといふ信仰に基くことは言うまでもない。また日本という國號について考察を加え、この文字は朝鮮で作られたものが、わが國にとり入れられたものであらうとする内田銀藏博士の説は首肯し得るも、わが國人が倭の字より

も日本という文字を選んだのは中國の書物に傳うるが如く、その字が單に雅であつたからばかりでなく、日出ずるところであるという意味から、その點に言いしらぬ誇を感じていたからであるとし、わが國において日本という觀念が發展成熟したのは單に東の方という意義の故ばかりでなく、日の觀念は直に日神とのつながりがあるためであり、それは大化の改新の時に公に採用されたものであつて、ここにも神國觀念との一脈のつながりがあるとなしている。

結語において著者は、古代の國民を代表するものは貴族であることを各方面より論じ、従つて本論文で取扱つた政治思想は、古代の國民既ち貴族の思想であることを述べている。さらに古代の思想に關して等閑に附することの出来ないシナ思想の影響について、著者は、儒教の影響の大であつたことを認めつつも、それは皮相的のものであつて、古來特有の思想を變じたものでないとし、わが古代の政治思想の根本的のものは、その宗教的信仰にもとづく神國觀である。しかし、この觀念のために國民の精神的開明は著しく阻害さるところがあつたのであつて、人道主義、合理主義或は自由主義思想の發達が甚しく遅れたのはこのためである。今や新しき日本を建設するためにはこの古い觀念は粉碎されねばならぬと結んでいる。

以上本論文の概要を述べつつ、各章における著者の新研究と認

めらるるものを紹介したのである。これを全體的にみれば、わが古代人の政治思想を研究したものとて、極めて優秀であるばかりでなく、今までにない卓越せる著作であると思はれる。

また各章において、著者は從來の諸説を或は反駁し或は敷衍して新説を出してゐるのであつて、例えば「オホヤシマ」の意義または「葦原中國」「豐葦原瑞穗國」等の解釋は、古代人の國土觀念を知る上において重要であり、「うつしきあをひとくさ」「オホミタカラ」「公民」の解明によつて、古代の統治理念が明にされたのである。また古代における天皇觀もあますところなく論述せられ、天皇は神であるがために絶對者であるが、同時にこのためにその專恣が抑制され、政治的に無力なるものとなつたという著者の説には、傾聴すべきものがある。「マツリコト」「知らず」等についても進んだ解釋が行われ、古代人の統治觀念が明瞭にされてゐる。神國觀念及び日本という國號の起源についても、著者の考察は當を得たものと考えられる。わが國の古典がシナより輸入された文字によつて書かれ、従つてシナ古典の字句をそのまま用いた場合が多いために、シナ思想の影響を過大視する傾向が往々にして強いのであるが、著者は本論文の各所において、これに論及し、その然らざる理由を明確にしているのである。

政治史の立場からみるならば、大和朝廷成立以前の狀態、大和朝廷成立の過程及び時期等の解明など、なお論ぜらるべき問題が

あるかも知れない。しかし著者が本論文で取扱つたのは、政治思想であつて政治史ではない。著者はあらゆる根本史料について、古代人の國土觀、國家觀、統治者觀、人民觀等をつぶさに研究したものであつて、上記の如き問題には、直接ふる必要がなかつたのであるが、もし本論文にいくらかでも缺くる所があるとすれば、この點ではないかと思はれる。これを要するに、本論文は著者が多年大學教授の職にあつて、不斷に研鑽した結果を披瀝したものであり、わが古代史上における重要な諸問題の研究に、極めて大なる貢獻をなしたものと認められる。依て、著者に文學博士の學位を授與するを適當と認める。

昭和二十五年十二月四日

主 査 委 員

慶應義塾大學教授	日本政治史	今 宮 新
慶應義塾大學教授	國 語 學	
慶應義塾大學教授	國 文 學	折 口 信 夫
慶應義塾大學教授	史學概論	擔當
	歐米政治史	文學博士 間 崎 方 里

昭和廿四年度春期伊逗山神社見學旅行記

春期史學會旅行の選定に當り史學科委員合議の末、舊來の如く

學會の補助も思ふ儘に得られず、又旅行費用も相當の負擔となる故、伊豆の名所、三嶋神社の拜觀を決定、尙秋の旅行は永年の宿望である奈良、京都、白川村の見學を決定せり。以下其の見學旅行の報告を記述する。参加者は淺子、清水先生を始め史學科塾生十名東京驛八時三十五分發沼津行に依り、十一時二十八分三嶋驛着、十二時三嶋神社に到着せり。直ちに一行は晝食を濟ませ古文書見學の準備中を利用、折から同神社に丁度開催中の文化展を見學す、文化展には同神社所藏の他、伊豆神社一般所有者よりの出品物も有り、其の物の眞疑は(伊木先生等の参加を得られず)解らないのが残念であつたが

○頼家奉納の心經一卷

○三嶋本

○日本書記三冊(應永三五年六月一日寫)

○伊豆山神社の國寶、後奈良天皇御宸翰(紺紙金泥、摩訶般若波羅密多心經)

○和漢朗詠集(函入二冊正親町院御筆伊豆山廉島氏藏)

○三嶋神社、寛永古圖

○三嶋神社附近出土品として、古墳出土玉類各種、裝身具各種(夏櫻木源平塚古墳出土)彌生式土器(三嶋市千枚原出土)後期繩紋式土器(三嶋市奥山出土)中期繩紋式土器(三嶋市千枚原出土)其の他石斧、石錘、石鏃、石皿等、